近世日蓮教学における一念三千と妙法五字について

本田榮秀

日蓮にあっては釈尊所説の一切経中、妙法蓮華経がいわゆる五時八教等の教判を経て、出世の本懐、随自意の教説とする点は天台、伝教の先師と考えを同じくするものの、彼らはあくまで像法過時の人であるのに対し法滅尽時の末法における法華経の行者としての自覚を、いわゆる大難四ヶ度、小難数知れずという法難を体験する度に深めていったのである。宗学上、釈尊―天台―伝教―日蓮と系譜する外相承に対し法華経の行者の自覚はやがて世にいう竜口法難以後、法華経涌出品に明された本化上行菩薩の再誕、即ち仏使上行の自覚に深まり、釈尊―上行―日蓮という信仰的系譜、即ち外相承に対応する内相承が形づくられていった。

このことは妙法蓮華経（Saddharma Puṇḍarika Sūtra）の経題釈も必然的に天台、日蓮で異り、天台にあっては妙法蓮華経は所詮、経の題名に留まるのに対し、日蓮にとっては法華経神力品所説の結要付属、下種の要法であり、法華経一部二十八品の当体、日蓮遺文『観心本尊抄』に云うところの釈尊の因行果徳、末法濁悪の世にあって誤って毒薬を飲み、本心を失って苦しむ衆生に与えるべき唯一の良薬、また無知なる赤子を養う母乳そのものであった。

このような解釈は法華経迹門方便品に説かれる十如実相の文を手がかりとした摩訶止観所説の一念三千の法門からは生れるはずがないのであり、古来『本化別頭』といわれる日蓮独自の法華経観を俟たねばならない。

即ち日蓮にあっては天台の説くように一心三観の知恵により法華経所詮の実相の理を悟る方法ではなく、法華経神力品で上行等の本化地涌の菩薩に対し、結要付属、末法の衆生に与える下種の要法として授けられ、寿量品の文の底に沈められた妙法蓮華経の五字を、そのまま釈尊の因行果徳と受けとめることで天台でいうところの一念三千の悟りと同じ功徳を得ようとした。いわゆる信の一字をもって恵に代えたのである。

そもそも仏教は衆生即ち庶民の安心、心の救いを目指して、はじめて仏教は宗教たりうるとする考えは日蓮自身にも見られ、彼自ら『旃陀羅が子』と云い『日蓮が法華経の智解は天台伝教には千万が一分も及ぶことなし』と自己規定し、更には『余経も法華経も詮なし』として数多の法難に屈することなく、題目五字七字の弘通に自己の全生命をかける結果となった。

宗門史上、文禄四年（一五九五）豊臣秀吉によって催された千僧供養会に端を発した不受不施論争は宗祖日蓮の折伏的態度を守る旧関東学派と、柔軟な摂受的態度に立つ関西学派の二大潮流を形成することとなるが、この関西学派は教学史上すでに指摘されるように、今昔二円、円体無殊の立場から天台三大部を中心に原始天台を研究内容とした、いわゆる檀林教学を発達させることとなり、反面、祖書、即ち日蓮遺文をも天台学を基準に解釈する台学偏重の学風を生むに至った。

一念三千と妙法五字の関連をこのような視点に立ってみるとき例

えば檀林修学時代四明学の研究に専念した観如日透（1653～1717）に『本門事一念三千義』の著書がある。この書によれば法華経迹門に立つ天台理観と本門による事観、即ちあるがままの事相に互具円融の妙を観ずる『事がまま』の観念があるとし、妙法五字を口に唱える唱題行は口業であり、上根の機に対しては天台の理観に準じて助行の事観を認めたのである。

このような台学偏重の流れにあって、祖書の研鑽を学問の中心にすえ、日透以後宗学の組織化を意図して『祖書綱要』二十三巻を著わした一妙日導（1724～1789）は、日透が上根の機に対して天台流の観法を勧め、妙法五字の受持即ち唱題はむしろ下根を対象としたものであるとするのに対し、上根下機ともに正行である唱題行を主張する点は、唱題重視の意味で天台学を一歩脱却したものといえよう。

更に顕本義においても日透が『事がまま』即ち十界の諸法すべて如来所証の全体とする説を踏まえ、日導は天台でいう無相不可見の理本覚から眼前の事相に互具円融の妙を観る事本覚へ前進したものと考えられる。換言すれば法華経本門寿量品に釈尊の久遠実成が明かされ、この事実を信じることにより、われら理即の凡夫もまた無作本覚の如来であると悟る、つまり『開目鈔』にいう発迹顕本の立場から真の十界互具、一念三千の意義が完うする日蓮本来の立場への一歩前進である。

日透、日導両師の、無作本覚を内容とする顕本義は本妙日臨の宗学を経て近世日蓮教学の大成者と言われる優陀那日輝（1800～1859）に引き継がれることとなるが、彼によれば先輩格の日透、日導の説は発迹顕本を主張する点では天台理観を一歩脱却したものの、彼ら両師の無作本覚義は昨日までの凡夫を今日から仏と言いかえるのみの単なる自然覚で、倶体倶用、名実相伴った顕本義ではないとの批判を行っている。

即ち宗祖日蓮における一念三千の観法は内観の意に留まらず、日本国の一切衆生を相手とした折伏逆化の弘経であり、日輝にあっては幕末文明開運の時代に当り、折伏逆化に替る摂受開会により、宗祖日蓮の真精神を時代に生かし、仏法を活法門たらしめることをもって一念三千の真実義とした。

以上述べ来ったように日奥（1565～1630）に代表される不受派の教学が不受余経一偈、法華独一成仏を掲げた折伏行であったのに対し、日輝に至る近世内省派の教学が、観心宗学の名で呼ばれるように、発迹顕本を手がかりに自己の内省観察の行を経て、わが身また仏なりとする己心本尊義を詮顕するという思弁性を深めるに至った。

このような思弁性は天台の観法に由来するものであり、日蓮宗学の母胎をなすものであろうが、亦後の学者の批判するところでもある。しかしながら宗教が単に思弁哲学でなく論理性を超えた存在であるとすれば日蓮の宗教はまさにそれに価するものである。即ち法華経迹門方便品所顕の十如実相に基く天台の一念三千は、観念思惟の究極において妙法五字となるのではなく、法華経本門所顕の発迹顕本つまり釈尊の久遠実成が明されたことで妙法五字に飛躍転換され、この妙法五字の受持こそが事の一念三千であり、宗祖日蓮の説くところであった。（五七、八、二四）注記省略。

（中村学園女子高校教諭）

近世日蓮教学における一念三千と妙法五字について（本　田）